

多賀城市遺跡調査報告会

—平成 28 年度の調査成果—



平成 29 年 6 月 24 日（土）

会場 多賀城市市民活動サポートセンター

3 階大会議室

主催 多賀城市教育委員会

多賀城市遺跡調査報告会

1 開会 13:30

2 開会挨拶 多賀城市教育委員会 教育長 小畑 幸彦

3 報告

1 山王遺跡第170～176次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 村松 稔

2 ほ場整備事業に伴う発掘調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 丹野 修太

3 市川橋遺跡第92・94次調査

多賀城市埋蔵文化財調査センター 畠山 未津留

休憩 14:40～14:50

4 東田中窪前遺跡第8次調査

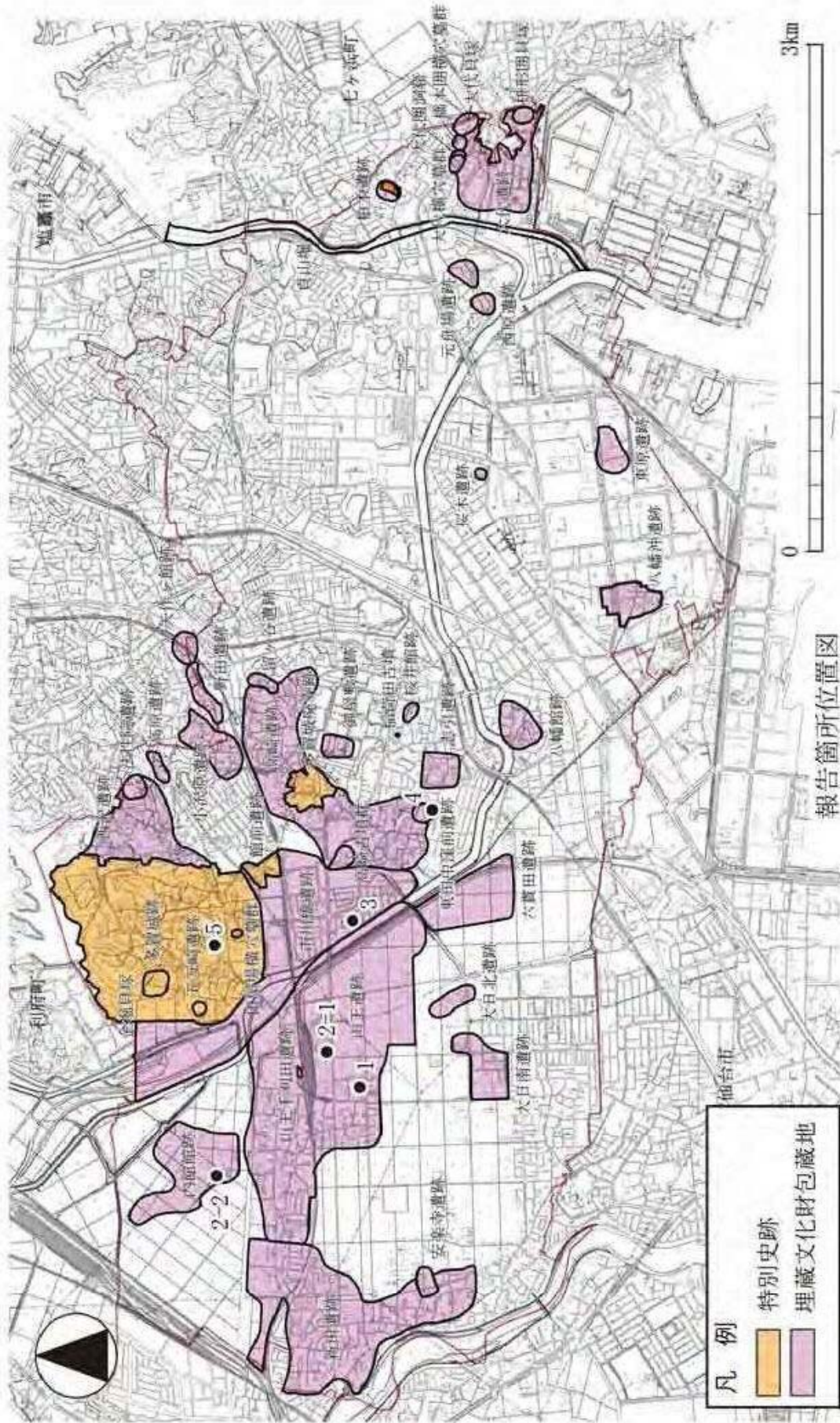
多賀城市埋蔵文化財調査センター 石川 俊英

5 多賀城跡第90次調査

宮城県多賀城跡調査研究所 廣谷 和也

4 閉会 15:30

※閉会後 速報展見学 埋蔵文化財調査センター3階展示室



報告箇所位置図

- 凡例
- 特別史跡
 - 埋蔵文化財包蔵地

1 山王遺跡第170～176次調査

1 調査要項

所在地：多賀城市山王字山王四区 89 番 3、91 番 1

調査原因：個人住宅建築

調査期間：平成 28 年 9 月 6 日～平成 28 年 12 月 24 日

調査面積：第 170 次：49 m² 第 171 次：35 m² 第 172 次：39 m² 第 173 次：42 m²
第 174 次：38 m² 第 175 次：52 m² 第 176 次：51 m²

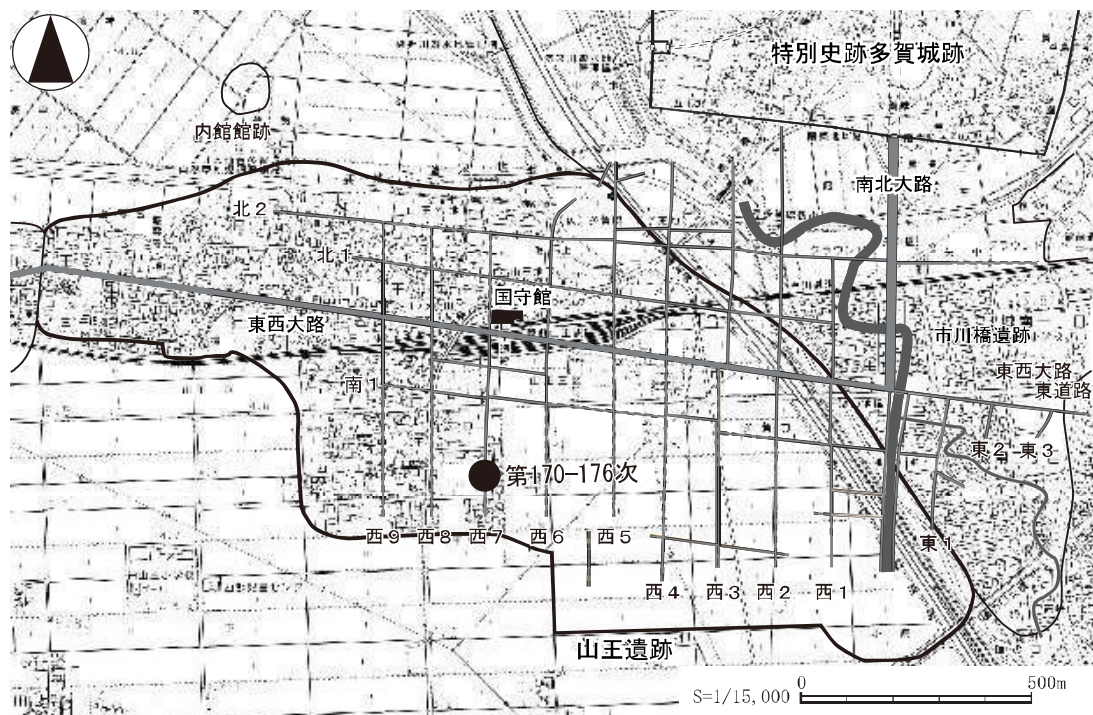
2 遺跡の概要

山王遺跡は、七北田川の東岸約 1 km 付近から砂押川西岸にかけての微高地及び低湿地に立地しています。東西約 2 km、南北約 1 km の範囲に広がっており、市内でも最大規模の面積があります。

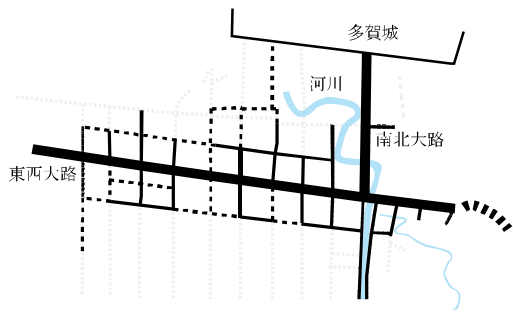
本遺跡では、これまで数多くの調査を実施しており、弥生時代の水田跡や、古墳時代の大規模な集落跡、平安時代の古代都市、中世武家階級の屋敷跡などが確認されています。



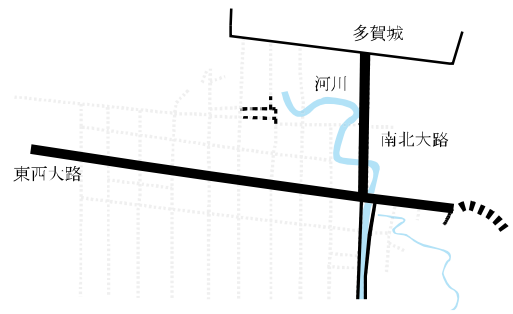
図版 1 調査区と多賀城跡（南西から）



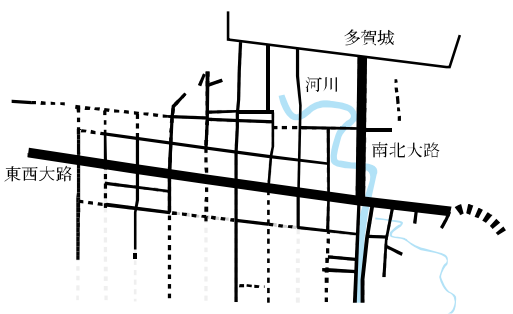
図版 2 方格地割と調査区の位置



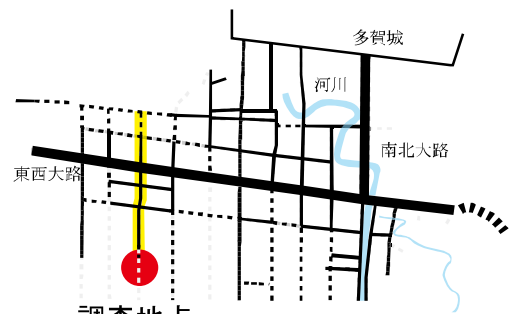
II期
東西大路周辺に街区が形成



I期
南北・東西大路と運河の整備



IV期
東側と北側の一部で街区が廃絶



III期
まち並みが最大となる

図版3 方格地割の変遷図

西暦	年号	陸奥国関係事項	国内の事項	政庁変遷	方格地割変遷
724	神亀元	多賀城創建		第I期	I期
743	天平15		盧舎那仏造営の詔		
749	天平21	小田郡で黄金産出		第II期	I期
760	天平宝字4	桃生城造営			
762	天平宝字6	多賀城碑建立		第III期	II期
764	天平宝字8		藤原仲麻呂の乱		
767	神護景雲元	伊治城造営		第III期	II期
774	宝亀5	海道蝦夷の反乱			
780	宝亀11	伊治公皆麻呂の乱		第IV期	III期
784	延暦3		長岡京遷都		
789	延暦8	朝廷軍が胆沢で大敗		第IV期	IV期
794	延暦13		平安京遷都		
802	延暦21	胆沢城造営			
803	延暦22	志波城造営			
869	貞観11	陸奥国大地震			
934	承平4	陸奥国分寺七重塔焼失			

表1 多賀城関連略年表

特に注目されるのが、平安時代において多賀城南面に建設された古代都市です。この古代都市は、東西・南北大路の幹線道路を基準線とした、およそ1町四方に区割りされたまち並み(=都市空間)となっており、その広がりには南北0.9km、東西1.7kmに及んでいます。大路は古代の官道であり東山道と考えられ、東西大路沿

いには「国守館」をはじめとする国司クラスの邸宅が立ち並び、それより1区画離れた場所には下級役人の住まいが設けられるなど、区画内で土地の選定がおこなわれていたことが明らかになっています。

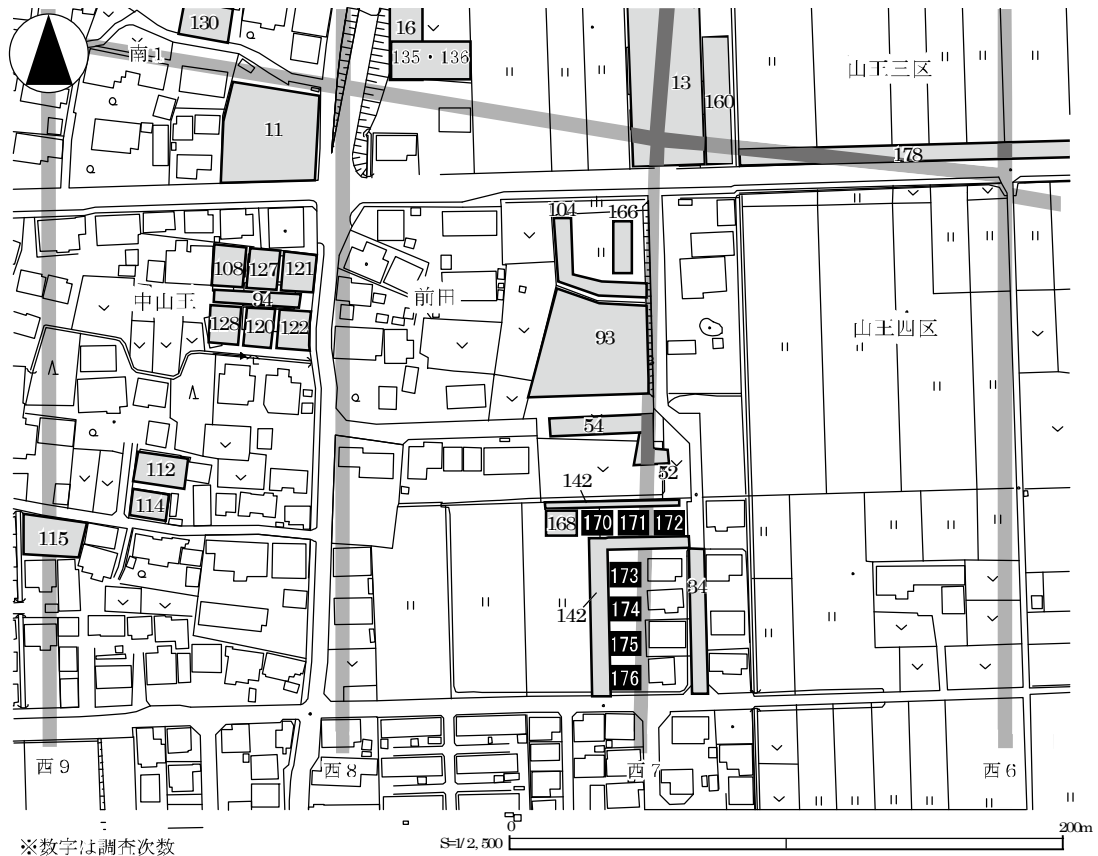
この古代都市は当初からすべての道路がつくられたのではなく、次の方格地割りⅠ期～Ⅳ期にかけて段階的に施工されたことがわかっています。

方格地割Ⅰ期 多賀城にのびる南北大路（幅18m）と多賀城外郭南辺築地と平行する東西大路（幅12m）がはじめに整備されます。さらに、蛇行していた河川が政庁中軸線上に沿って南北に直線に改修され、その両岸には西0・東0道路がつくられます。水陸交通が整備された時期と考えられます。

方格地割Ⅱ期 南北大路が幅約23mに改修されるとともに、北1・南1道路がつくられることで、東西大路をはさんで南北1区画ずつの方格地割ができる時期です。小路はⅡ期からⅢ期にかけて段階的に整備されていくものと考えられます。

方格地割Ⅲ期 方格地割の施工範囲が最大となり完成期といえます。一方、この時期の後半頃から道路側溝がほとんど埋まったままとまっている様子が見られることから、城外の道路維持管理が滞っていたことが推測されます。

方格地割Ⅳ期 方格地割の再整備の時期にあたります。ほぼⅢ期の地割りを踏襲していますが、一部再整備されずに廃絶しています。また、南1道路も北へ移動する時期にあたります。



図版4 第170-176次調査区と周辺の調査区

3 調査成果

今回の調査では、西7道路跡、溝跡、建物跡、小溝跡等を発見しました。ここでは時代ごとに記述していきます。

【古墳時代】

現地表から約2m下で発見しました。畦の跡を第172次調査で2条、第173次調査で3条確認しました（図版5・6）。同様な水田跡は、本遺跡では多賀前地区や掃下し地区や西側に隣接する新田遺跡でも発見しています。出土遺物や土壌の科学分析から古墳時代初め頃の水田跡と考えられており、当時広い範囲で水田が営まれていたことが明らかとなりました。



図版5 水田の畔の跡（第172次 北東から）



図版6 水田の畔の跡（第173次 北東から）

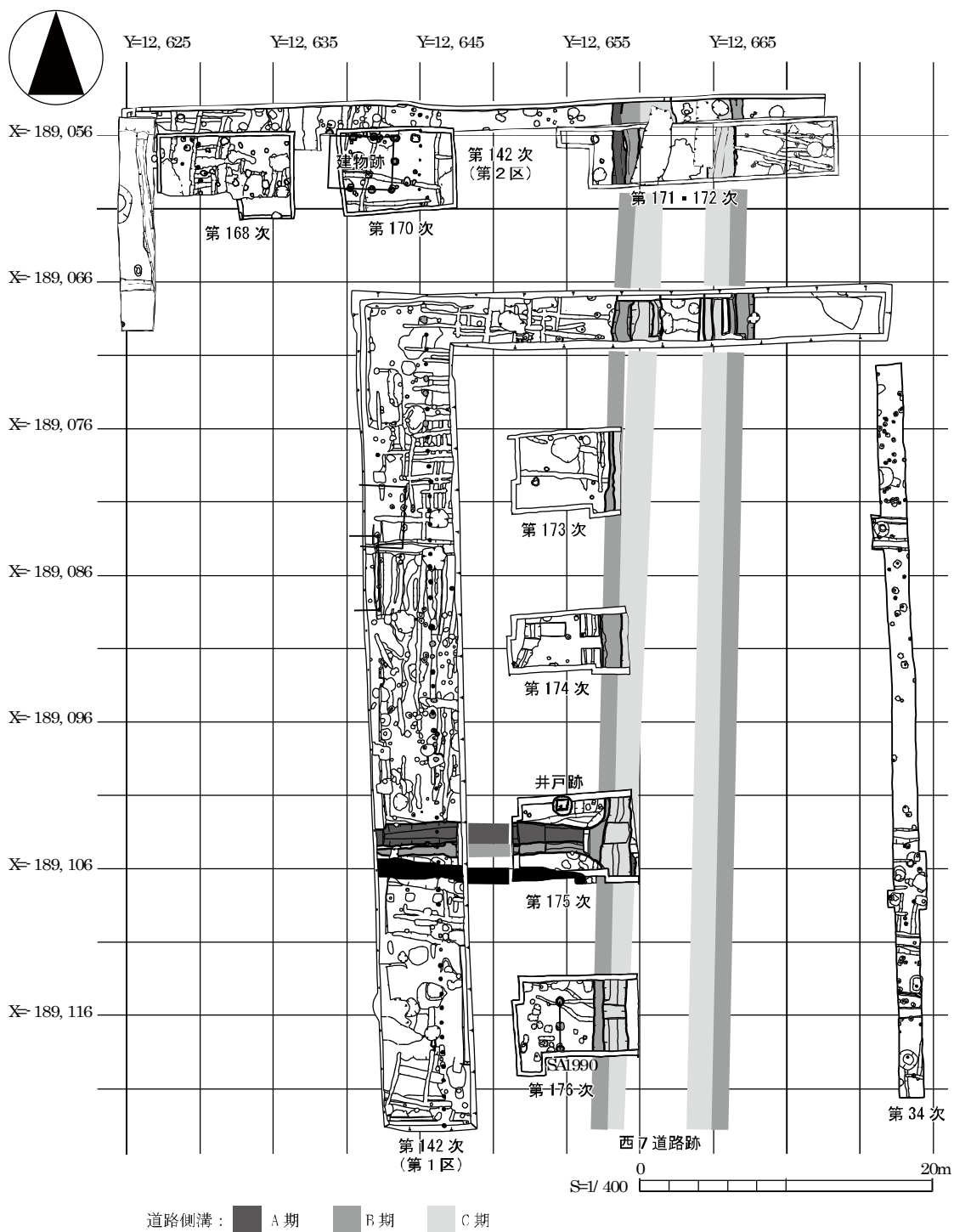
【平安時代】

西7道路跡

第171～176次調査で発見した南北方向の道路跡です（図版8）。素掘りの側溝をもつ道路跡で、特に第171・172次調査区では、東西の両側溝を確認することができました。2度の改修を行っており、古い順にA期からC期の3時期の変遷があることがわかりました。道路幅は、最も新しいC期のものとみると側溝心々間で5.5m、路面幅で3.3mでした。第171次調査区から第176次調査区まで約65mあり、さらに南側にのびています。側溝の規模は、C期で上幅1.8～2.2m、深さ50cmでした。



図版7 西7道路跡（北東から）



图版8 西7道路跡平面图

遺物は、土師器や須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器のほか、役人が身に着ける帯につける飾り石である巡方などが出土しました。

年代は、10世紀初め頃に降下した灰白色火山灰との前後関係から、A期は10世紀初めより古く、B・C期はそれより新しいことがわかりました。このことから、方格地割Ⅲ期につくられ、Ⅳ期まで機能していた様子うかがえます。



図版9 第173～176次調査区全景（真上から）



図版10 西7道路跡調査風景（北東から）



図版11 西7道路西側溝（北から）



図版12 西7道路西側溝出土 石帯（巡方）

建物跡

第170次調査区で掘立柱建物跡を発見しました（図版8）。位置関係から、第142次調査区で発見した柱穴が隅柱と考えられ、その結果、桁行3間、梁行2間の東西方向の建物跡と考えられます。

井戸跡

第175次調査区で発見しました（図版8）。直径約1.3mの円形の掘方を持ち、一辺約0.7mの井戸枠を据えたもので、深さは約1.1mあります。井戸跡からは漆器椀の破片が出土しています。



図版 13 掘立柱建物跡（南東から）



図版 14 井戸跡（北東から）

溝跡

第 175 次調査区では、東西方向の溝跡を 2 条発見し（図版 8）、そのうち溝跡 1 としたものは、西 7 道路跡と接続していることから区画溝と推定されます。溝跡 1 では、2 時期の変遷（A 期→B 期）があり、そのうち古い A 期が西 7 道路西側溝の B 期と、B 期が西 7 道路西側溝の A 期と接続していることがわかりました。



図版 15 西 7 道路西側溝と区画溝（北西から）

4 まとめ

今回の調査では、西 7 道路跡を確認し、その西側隣接地の区画内の様子が一部明らかとなりました。

西 7 道路跡は今回の調査区を含め 10 箇所の調査で確認されており、今回の第 176 次調査区が最も南側に位置しています。南北方向の小路では最も長く検出されている道路で、東西大路から南へ約 300 m にも達していることがわかりました。またそのつくられた年代も方格地割Ⅲ期にあたりと考えられ、方格地割Ⅳ期にかけて機能したと推定されます。

今回の調査成果は、方格地割の施工範囲や変遷を考える上で貴重な成果といえます。

2 ほ場整備事業に伴う発掘調査

1 山王遺跡第178次調査

(1) 調査要項

所在地：多賀城市山王字山王三区地内

調査原因：農村地域復興再生基盤総合整備事業

調査協力：宮城県仙台地方振興事務所農業農村整備部、多賀城市市民経済部、
宮城県教育委員会

調査期間：平成28年10月31日～平成29年2月3日

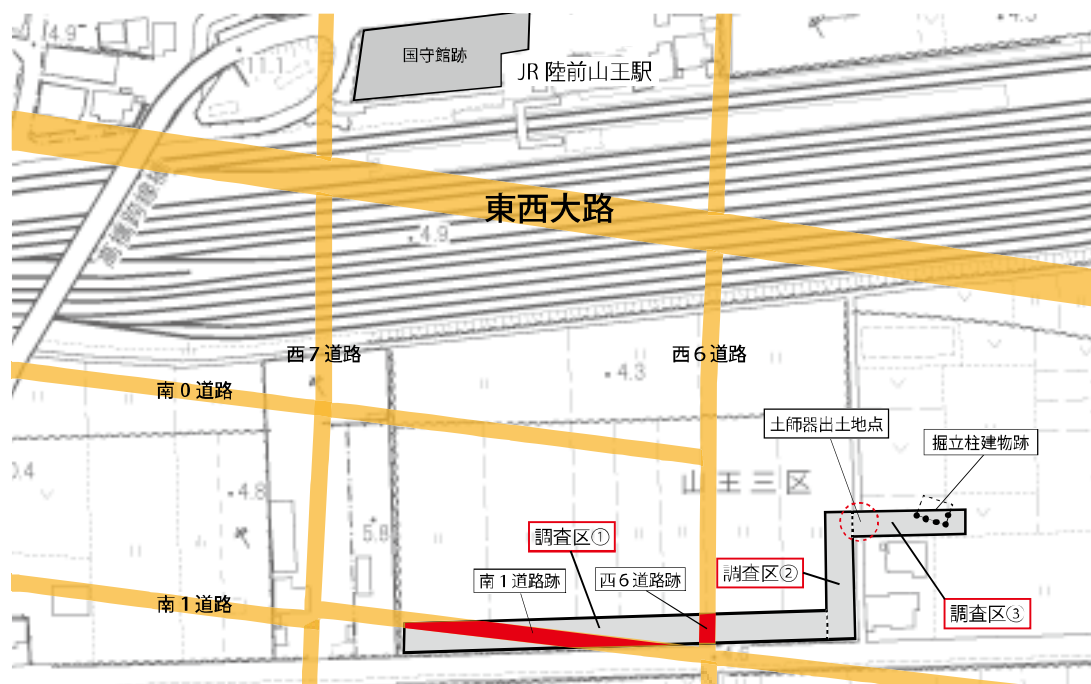
調査面積：平成28年度 795㎡

調査機関：多賀城市埋蔵文化財調査センター

(自治法派遣職員：東京都府中市、神奈川県)

(2) 調査の概要(図版1～7)

今回調査を行った場所は、JR陸前山王駅の南側で、古代の多賀城のまち並みを形成する道路のうち、主要道路である東西大路に近接しています。特にJR陸前山王駅の西側では国守館なども見つかり、山王遺跡の中でも遺構が密集している場所にあたります。調査の結果、平安時代の道路跡・道路側溝跡や掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡等が見つかりました。図版1の調査区①では、「南1道路跡」と「西6道路跡」が見つかり、道路側溝跡の新旧関係から、3時期の変遷があることが分かりました。



図版1 山王遺跡第178次調査平面模式図



図版2 南1道路跡検出状況（北西から）



図版3 西6道路跡検出状況（南から）



図版4 掘立柱建物跡確認状況（東から）



図版5 柱穴調査状況（西から）



図版6 土師器出土状況（北から）



図版7 白玉

この南1道路跡は、一番新しい時期で北側溝の上幅約2.2m、南側溝の上幅約2m、道路幅は北・南両側溝の心々で約6.3m、路面幅は約4mありました。同じく西6道路跡では、東側溝の上幅が約1.2m、西側溝の上幅は約1.5m、路幅は東・西両側溝の心々で約4mの範囲で確認しました。

また、図版1の調査区③では掘立柱建物跡を確認しました。建物跡は東西3間×南北1間以上を確認し、側柱（建物の骨組みとなる柱）だけでなく、側柱の内側に床を支えるための束柱の痕跡も見つかりました。柱を据えるための掘り込みは一辺70～90cm程あり、その中には当時の柱材が残っていました。

なお、掘立柱建物跡が発見された面を掘り下げたところ、古墳時代中期頃の土師器が出土しました。また、土師器甕や小型壺の内部には白玉と呼ばれる祭祀用の小さな石製品が入っていました。

2 ^{うちだてたてあと}内館館跡第1次調査

(1) 調査要項

所在地：多賀城市南宮地内

調査原因：農村地域復興再生基盤総合整備事業

調査協力：仙台市地方振興事務所農業農村整備部、多賀城市市民経済部

宮城県教育委員会（自治法派遣職員：兵庫県、岡山県）

調査期間：平成28年4月6日～平成29年2月24日

調査面積：平成28年度 4,160 m²

調査機関：多賀城市埋蔵文化財調査センター

（自治法派遣職員：東京都府中市、神奈川県）

(2) 調査の概要（図版8～17）

調査の結果、平安時代の集落跡と畑跡、室町時代の遺構が見つかりました。注目すべき成果は、地下の遺跡が地表の植物に影響を与えて生じるクロープマークが観察され、実際に堀跡が見つかったことで、全国的に見ても貴重な調査例となりました。館を区画する複数の堀が巡り、区画内部に掘立柱建物・井戸跡などの施設が見つかりました。

(3) 古代の遺構

掘立柱建物跡、畑跡、井戸跡、溝跡を確認しました。遺構の年代は出土した須恵器や土師器から平安時代のものと考えられます。

図版13の91T-3では南北2間以上×東西2間以上の掘立柱建物跡を検出しました。柱を据えるための掘り込みは一边70cm程あり、その中には当時の柱材が残っているものもありました。

井戸跡については、図版13の91T-2で検出し、直径2～3mの掘込みの中に、一边2m程の井戸枠を組んで構築していることが分かりました。この井戸枠は、四隅に丸木の柱を建て、外側に横板を当てて、さらに周囲を上で埋め戻すことによって、上圧で横板を抑え込む構造となっています。また、それぞれの柱同士は、柱に穿たれたホゾ穴へはめ込まれた横木で繋がれており、上圧によって柱が内倒れすることを防ぐ造りとなっています。さらに横板の外側には、縦板が並べて当てられていました。縦板には四角い穴が穿たれており、別な用途で使われたものを転用した木材であることが分かりました。

畑跡については、図版13の91T-1から北側を中心に多く分布しており、南北方向の畝跡や東西方向、斜行する畝跡が重複しており、複数時期に渡って畑地として利用されていたことが分かりました。



図版 8 掘立柱建物跡検出状況（南から）



図版 9 井戸跡確認状況（東から）



図版 10 板材出土状況（東から）



図版 11 畑跡全景（南から）

このように、内館館跡周辺は平安時代には、多賀城のまち並みから離れた場所であるものの、畑地として土地を利用していただけでなく、掘立柱建物や井戸など、生活の場としても使われていたことが分かりました。

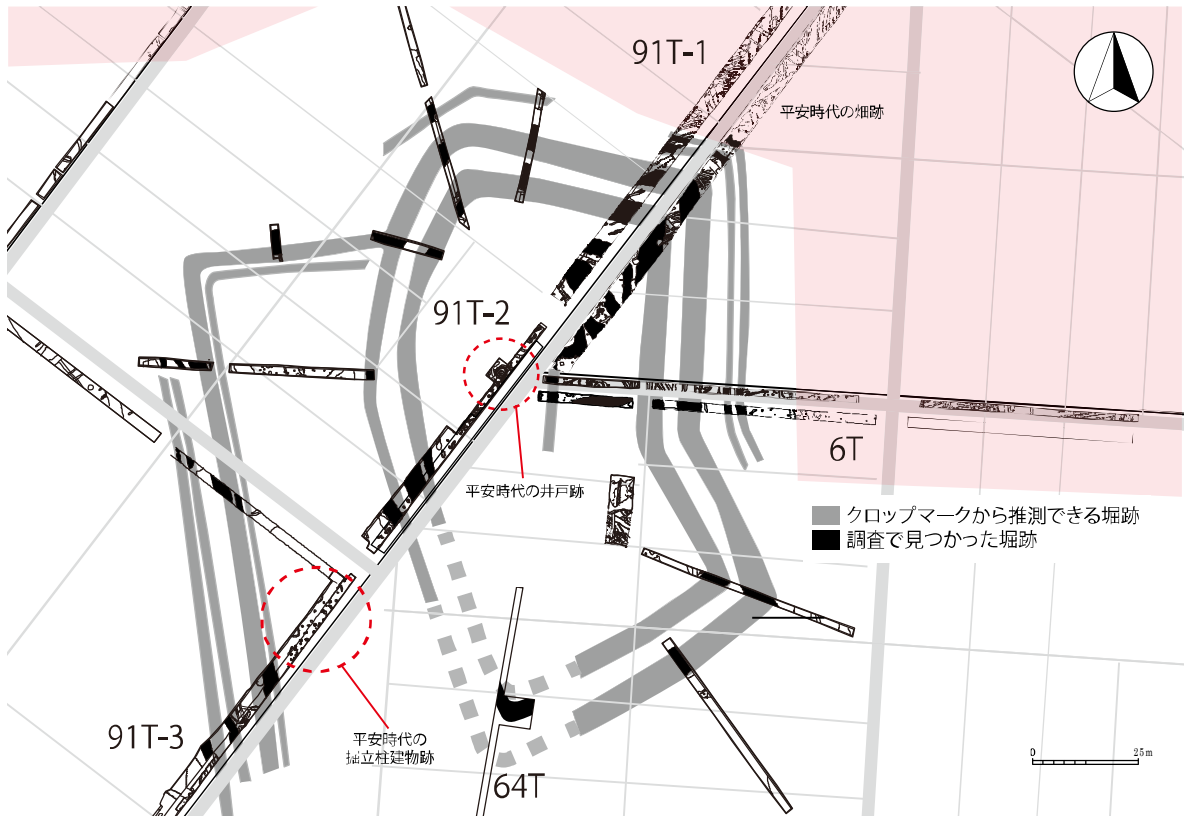
（４）中世の遺構（図版 13）

中世の遺構である堀跡は、規模の違うものが複数巡り、東側に歪んだ方形の区画（東区画）と、西側に接続する方形の区画（西区画）を確認しました。

東区画は2つの四角形が接続したような歪んだ方形をしており、2本から4本の堀跡が巡り、西区画においても2本から4本の堀跡が巡っています。堀跡の規模は大きなもので幅6.0 m、深さ1.0 m、小さなもので幅2.5 m、深さ0.5 mあります。館を囲む土塁は見られません。堀の内側では掘立柱建物跡や井戸跡など、館の主が生活のために使用していたであろう施設の一部が見つっています。



図版 12 内館館跡のクロープマーク（航空写真）



図版 13 内館館跡の構造



図版 14 出土した下駄



図版 15 出土した柄杓



図版 16 出土した漆器



図版 17 中世の銭貨出土状況

出土遺物から今回明らかになった内館館跡の年代は16世紀（1500年代）＝室町時代とわかりました。高級輸入品である青磁碗や、井戸跡から出土した赤い漆塗りの椀などは居住者の財力や生活の様子を窺わせます。

今回は調査範囲が狭く、堀によって形作られる区画の形状や内部の施設はごく一部しか確認できませんでした。

3 市川橋遺跡第92・94次調査

1 調査要項

所在地：多賀城市城南二丁目5-1および5-13

調査原因：個人住宅建設

調査期間：(第92次調査)平成28年5月23日～平成28年6月21日

(第94次調査)平成28年11月27日～平成28年12月8日

調査面積：第92次調査 19 m²

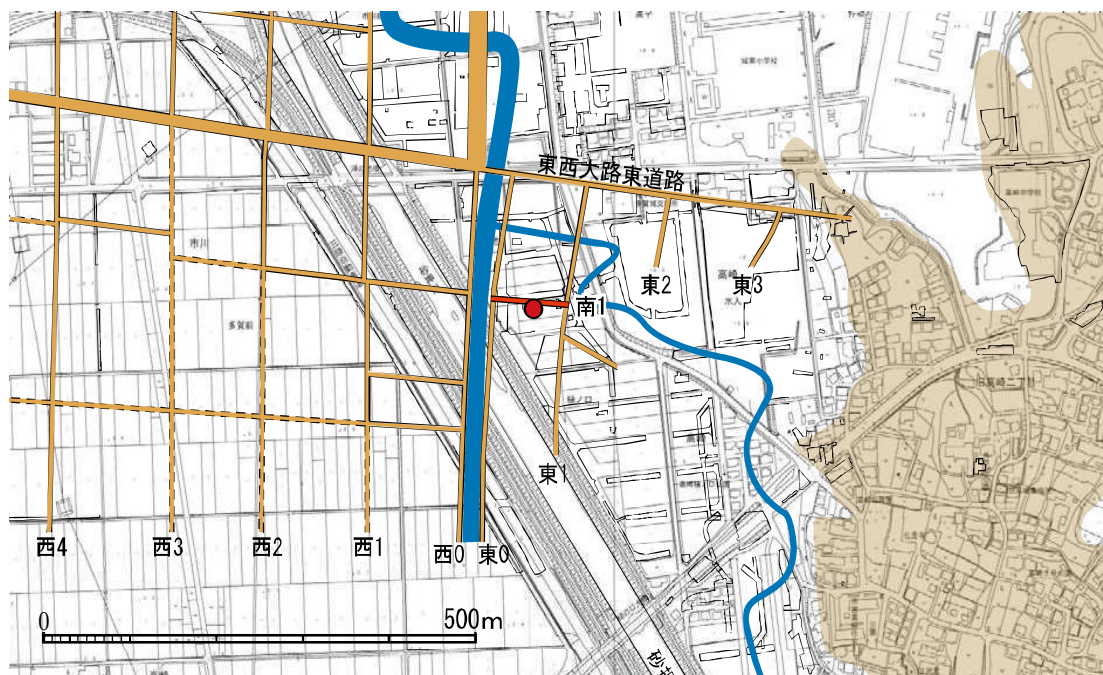
第94次調査 26 m²

2 遺跡の概要

市川橋遺跡は、国の特別史跡である多賀城跡（奈良・平安時代の国府跡）の南面一帯に広がる遺跡です。これまでの調査で多賀城跡と関連性のある多くの遺構や遺物が発見されています。中でも、平安時代に建設された地方都市の発見は、当時の国府周辺の様子を知る上で貴重な成果になっています。

3 調査の概要

今回の二つの調査地点はそれぞれ10mの距離をおいて、東西方向に隣接しています。調査の結果、両調査区から東西方向に延びる古代の道路跡が見つかりました。この道路は多賀城南面に整備された道路網のうち、南1道路と呼ばれる道路と考えられます。東西大路と並行して南側に造られた一本目の道路に当たるものです。この道路



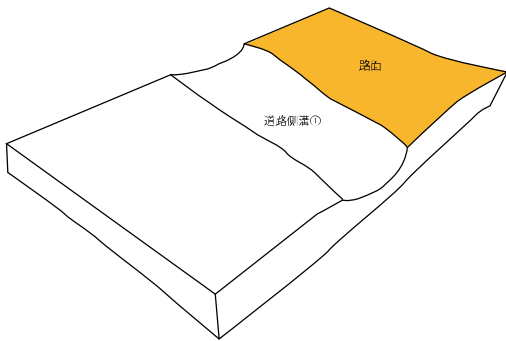
図版1 南1道路の位置（赤丸が今回の調査区）

跡は過去の調査でも確認されており、今回の調査区の東側および西側にもさらに延びていることがわかっています。

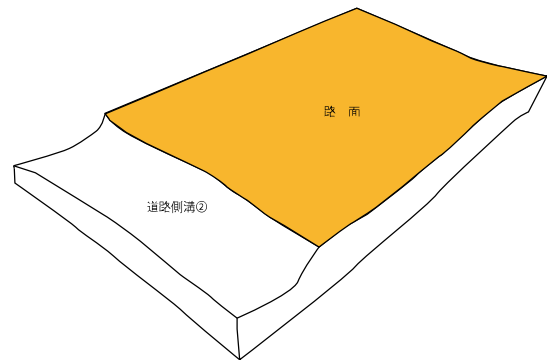


図版2 92次調査で見つかった道路側溝

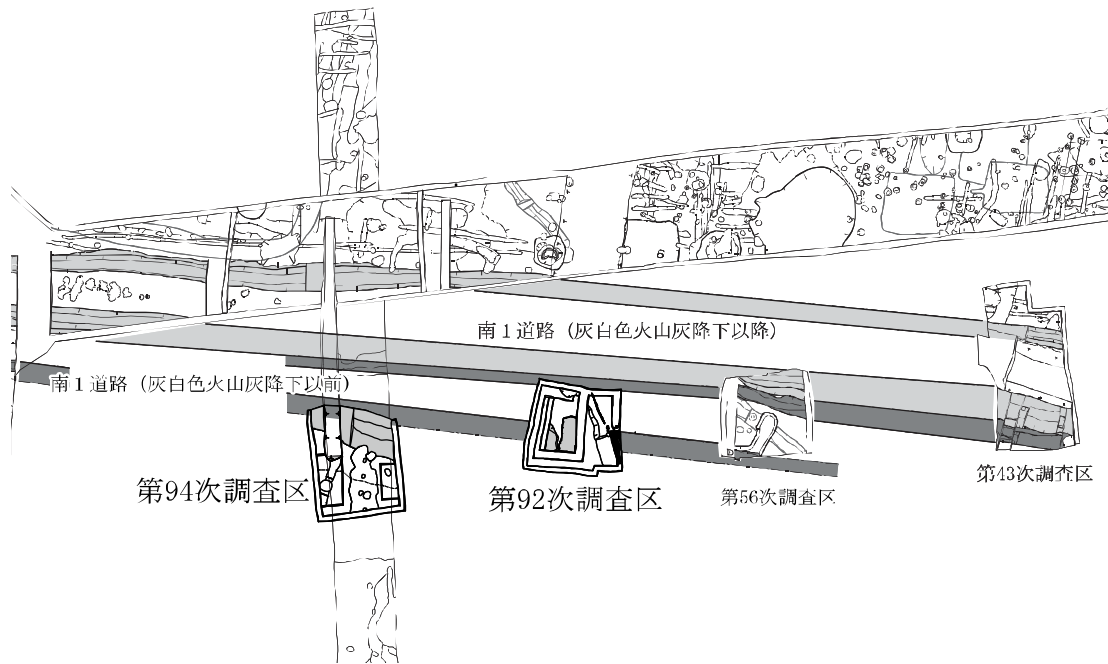
2本の道路側溝が見つかりました。いずれも道路の南側に掘られた側溝で、それぞれの側溝の右手が路面になると考えられます。



道路側溝①と路面の関係



道路側溝②と路面の関係



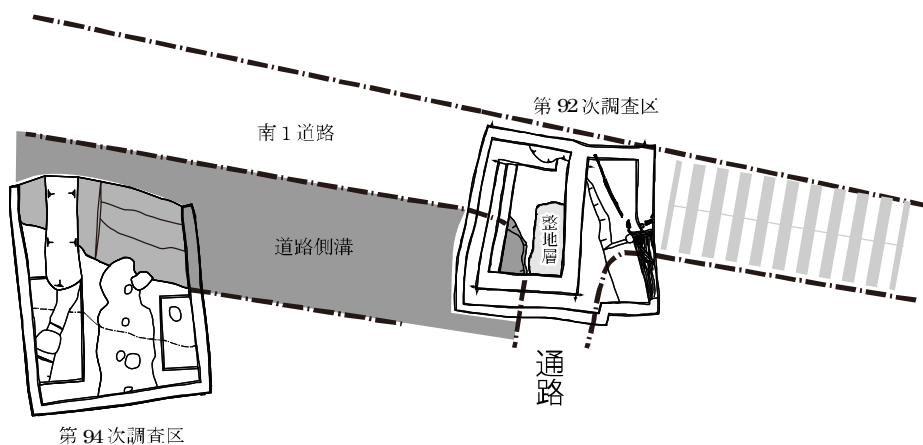
図版3 南1道路周辺図

4 第92次調査の成果

南1道路が造られたのは、東西大路周辺に街区が形成される8世紀後葉と考えられます。現在までの発掘調査の結果、南1道路が5回の作り直しを経ていることから、大きく5つの時期に分けられています。今回の調査では、そのうちの前半の3時期(9世紀代)の道路側溝を確認しました(図版3)。

写真にある道路側溝①、道路側溝②は、それぞれ違う時期の道路の考えられますが、どちらも南1道路の南側溝と考えられます。

また、発見された道路のうち、もっとも新しい時期(9世紀後半)の道路側溝は途中で途切れていました。そのため、この道路側溝が途切れる場所は、この道路の南への分岐点か、あるいは宅地部分への通路である可能性も考えられます。



図版4 92・94次調査で確認した9世紀後半の道路側溝

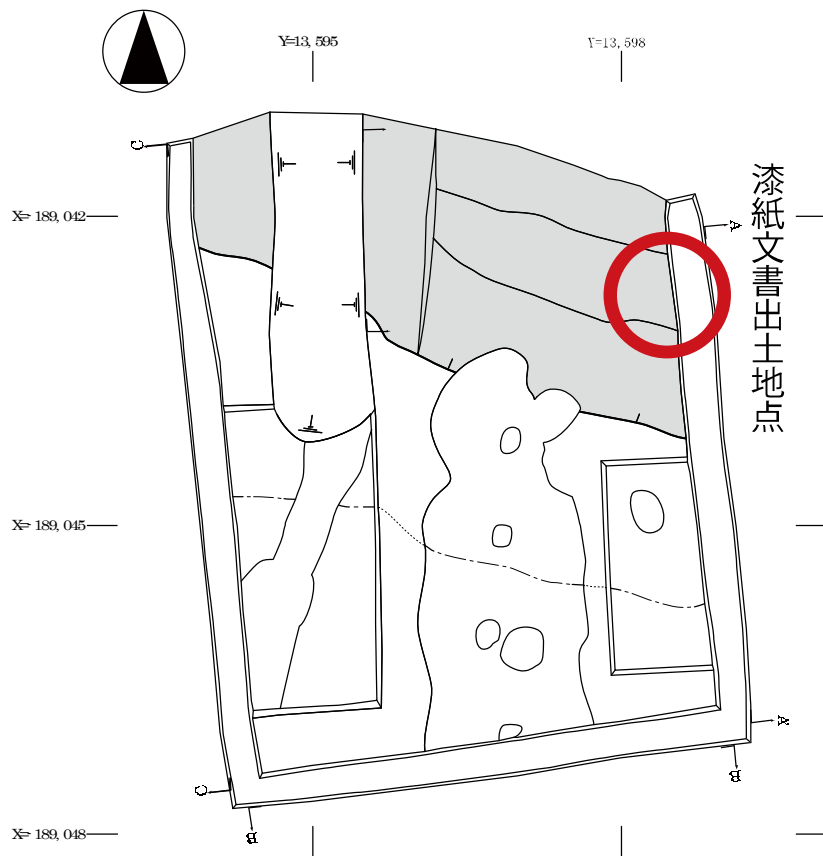
5 第94次調査の成果

9世紀後半頃の道路側溝を確認しました(図版5)。路面は側溝の北側で、調査区外にあると推定されます。道路側溝の中には10世紀初頭に降ったと考えられる灰白色火山灰が堆積していました(図版7)。このことから、灰白色火山灰が降下した時期には、道路が使われなくなっていたと推定されます。しかし南1道路はなくなったわけではなく、北に4~5m離れた場所に新たに作られています。

また、この道路側溝の底から、多くの土器とともに漆紙文書^{うるしがみもんじょ}が出土しました(図版8・9・10)。漆紙文書とは、漆を使った作業の際に、漆の乾燥を防ぐために不要になった文書を蓋として再利用したもので、しみこんだ漆によって紙が腐らずに残ったものです。その多くは戸籍、課税台帳や暦などの公文書が使われており、当時の地方の様子を文字によって直接知ることができる重要な手がかりになっています。昭和53年(1978)に日本で最初に多賀城跡で報告されました。



図版5 94次調査で見つかった道路側溝（南から）



図版6 94次調査で確認した道路側溝



図版 7 94次調査漆紙文書発見地点



図版 8 漆紙文書と須恵器坏

須恵器の坏を漆のパレットとして使用し、蓋紙がそのままの状態が残っています。漆塗布作業中に反故文書が使われたことがわかる資料です。



図版 9 漆紙文書と須恵器坏（上から）

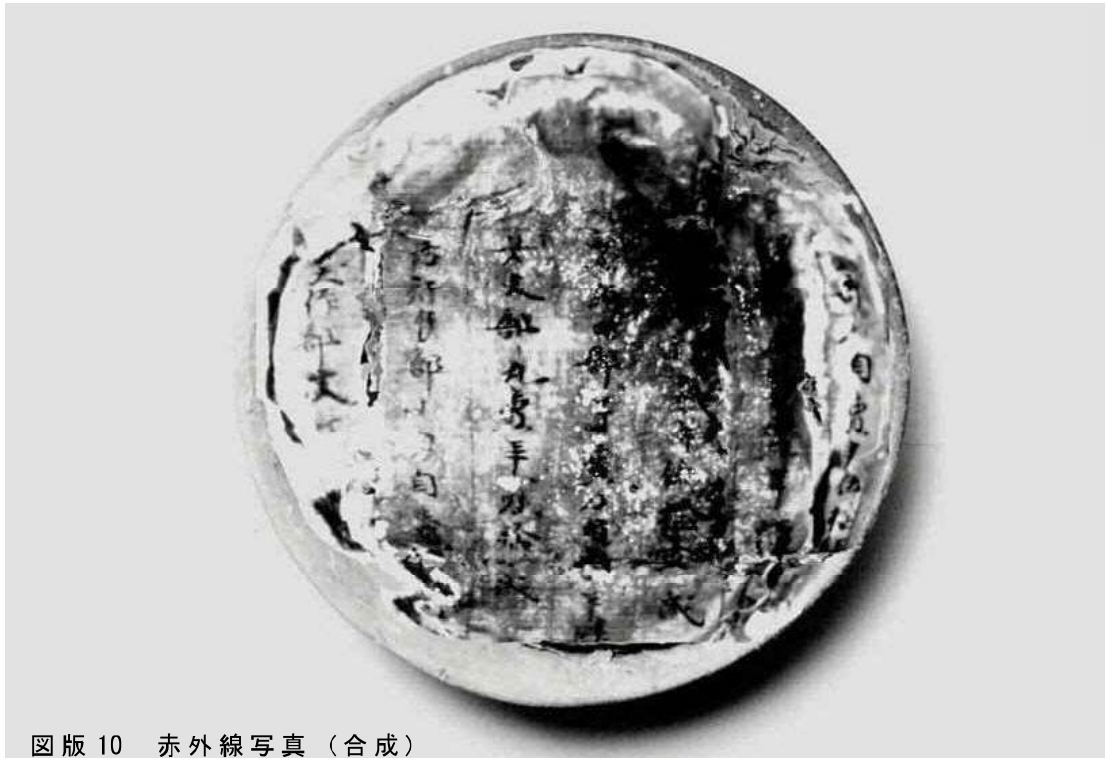
肉眼で文字を見ることはできませんが、文字の書き出し位置を揃えるための界線（縦）が見えています。

5 発見された漆紙文書について

この漆紙文書には七名の名前が記されています。また、書き出し位置を揃えるために引かれた線（界線）が、横方向に計三本、縦方向に計六本確認できます。このような様式は古代の文書でも戸籍や計帳（※）などの文書に確認できるものです。発見された漆紙文書も、これらの文書との関連性が高いと考えられます。

※「戸籍」と「計帳」

戸籍や計帳は、古代の律令政府が人民を掌握するために作成した文書です。戸籍は6年ごとにつくられ、班田収受を行ったり氏姓を正したりする原簿とされました。また計帳は課役（調・庸・雜徭など）を徴発するための台帳とされ、毎年作成されたものです。



図版 10 赤外線写真（合成）

- 部刀自売年伍拾□^{例カ}∴
 □部刀自売年陸拾□^{物カ}∴
 丈部繼成年伍拾壹歳
 妻額□部子広刀自売年肆拾□∴
 女丈部丸売□拾歳^{六カ}
 吉弥候部小刀自売□∴
 矢作部大万□∴
- ①（□べのとじめ とし じゅう（はち）※女
 ②（もの）べのとじめ とし ろくじゅう□）※女
 ③（はせつかべのつぐなり とし じゅういちさい）※男
 ④（つま ぬかたべのこひろとじめ とし しじゅう□）※女
 ⑤（むすめ はせつかべのまるめ とし（に）じゅうさい）※女
 ⑥（きみこべのことじめ□）※女
 ⑦（やなぎべのおおま□）※男

4 東田中窪前遺跡第8次調査

1 調査要項

所在地： 多賀城市東田中一丁目 234 - 1
調査原因： 宅地造成工事に伴う本発掘調査
調査期間： 平成 28 年 4 月 18 日から同年 7 月 26 日
調査面積： 1, 064 m² (対象面積：2, 204 m²)

2 遺跡の概要

東田中窪前遺跡は、高崎遺跡に隣接しており、標高 40 ～ 70 m の低丘陵南西端部に位置しています。これまで 7 次にもわたる調査を実施し、古代から中世頃の遺構を確認しています。第 1 次調査では布掘り掘方を伴う柱列跡、溝跡を発見し、第 2 次調査では竪穴住居跡、土壇、溝跡を発見しています。また、遺跡の分布調査において遺跡の中央付近に幅 10 m、深さ 4 m の空堀があり、それをはさんで南北に平坦面が形成されていたことが報告されています。

現況で確認はできませんが、本遺跡の北西 200 m 程の井戸尻地区には、中世「高崎氏」の館跡と考えられている通称「館屋敷」が存在することから、付近にこれと関連性のある館跡が存在していたのではないかと考えられています。

今回の調査は、平成 26 年 7 月から 8 月に行った第 7 次調査（確認調査）において溝跡等の遺構を発見し、この成果を受けて第 8 次調査（本発掘調査）として実施したものです。

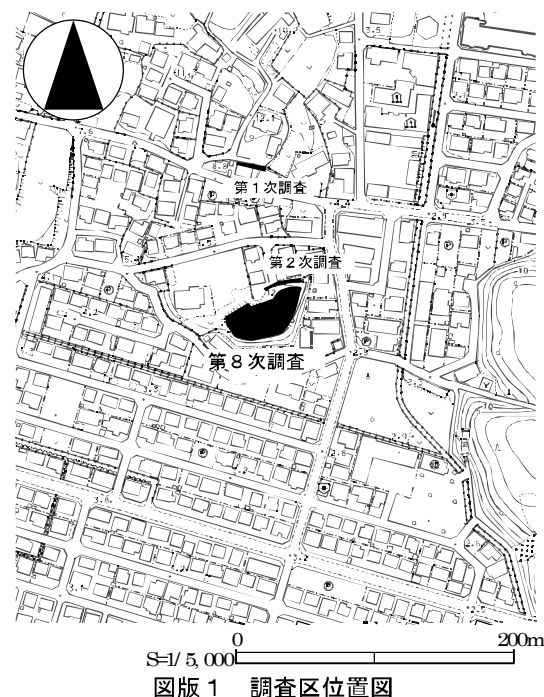
調査対象地は、周囲を宅地造成されたため、垂直に切り立つ残丘になっています。

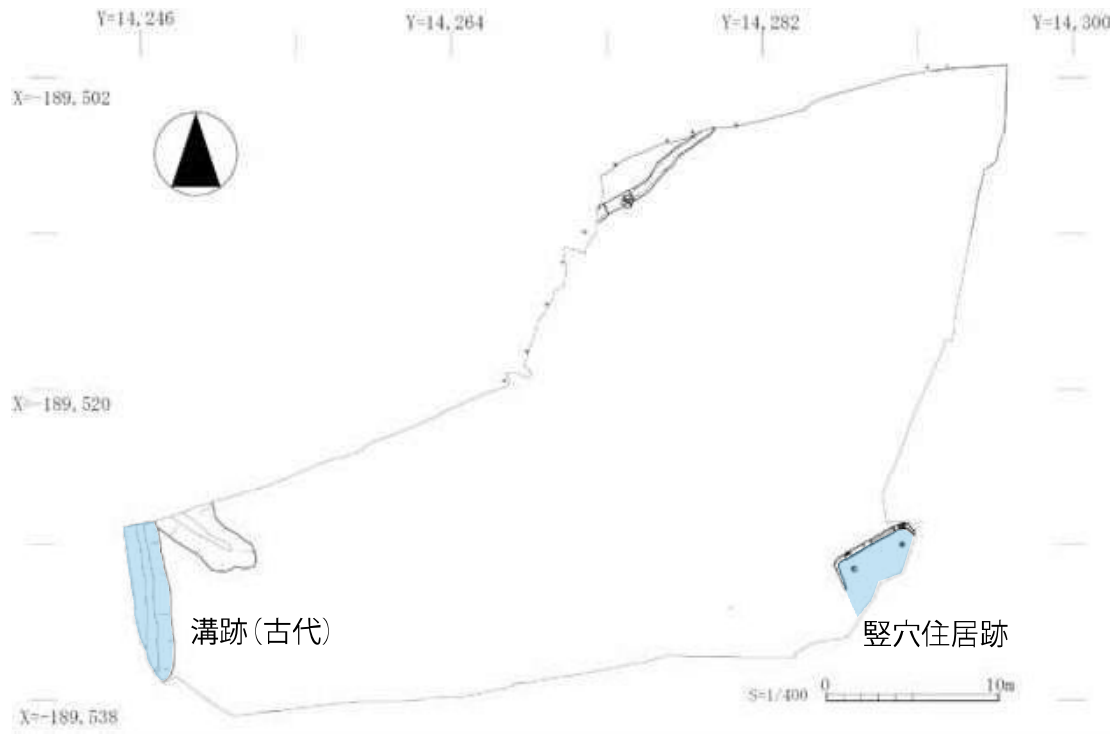
3 調査成果

掘立柱建物跡 3 棟、竪穴住居跡 1 軒、井戸跡 1 基、溝跡 16 条、土壇 17 基、ほか多数の柱穴を発見しました。以下で発見した遺構の内、主なものについて紹介します。

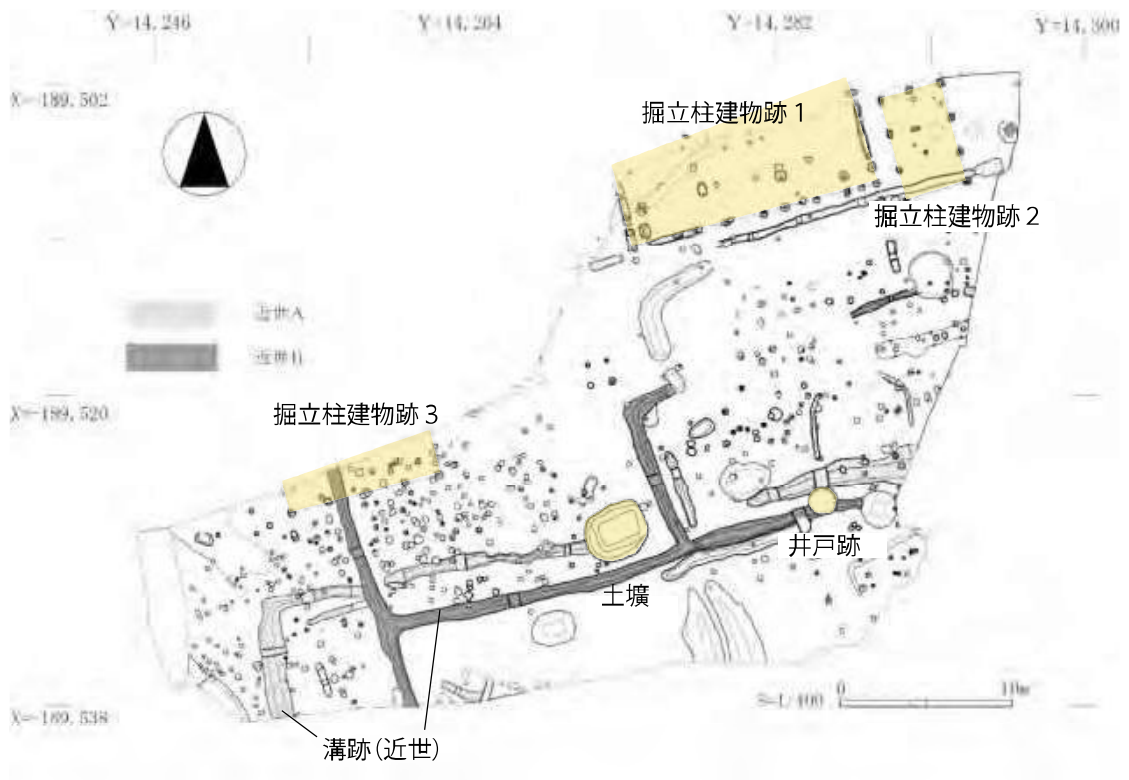
掘立柱建物跡 1 (図版 5・6)

調査区北端部で発見しました。東西 9 間 (14.8 m)、南北 6 間以上 (約 5 m 以上)





図版2 遺構変遷図（古代）



図版3 遺構変遷図（近世）

の規模があります。建物跡の延びは調査区北側に及ぶため、全容は不明です。建物跡の南・東・西側には布掘りと呼ばれる溝状の掘り込みに柱穴を確認しています。

掘立柱建物跡 2 (図版 5・7)

調査区北東端で発見しました。南北方向の建物跡です。南北 3 間 (5.93 m)、東西 1 間南側 (約 3.6 m)・東西 2 間北側 (3.61 m) の規模があります

掘立柱建物跡 3 (図版 5)

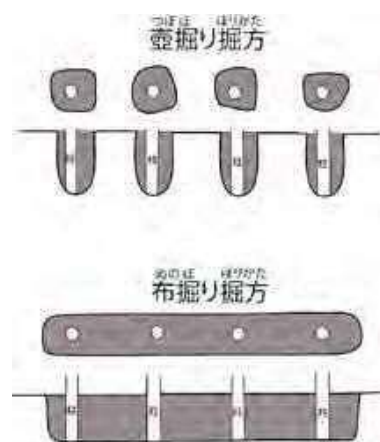
調査区北端部で発見しました、東西 4 間 (8.88 m)、南北 1 間以上 (1.2 m 以上) の規模があります。建物跡の延びが調査区北側に及ぶため、全容は不明です。

※布掘り掘方について

掘立柱建物構築のため、柱を立てる際には、まず柱より一回り大きい範囲を掘り込む必要があります、これを「掘方」と呼びます。

掘方には柱一本を立てるための壺掘りと、複数の柱を立てるためにひとつづきで掘られた布掘りがあります (図版 4)。

今回発見した掘立柱建物跡 1 は、布掘りと壺掘りの両方を組み合わせたタイプでした。



図版 4 壺掘り掘方と布掘り掘方

竪穴住居跡 (図版 5・8)

調査区南東側で発見した。住居跡の大部分は、後世の削平のため、失われており、住居跡北側の周溝と東・西側周溝の一部と支柱穴 2 基を確認できたのみです。規模は北辺で見ると約 5 m あります。遺物は土師器甕が出土しました。

井戸跡 (図版 5・9)

調査区の南半部で発見しました。平面形は円形で、直径は約 1.6 m です。壁は垂直に立ち上がっています。約 4.5 m まで掘り下げましたが、底面まで掘り下げることができなかつたため、本来の深さは不明です。

遺物は陶器揺鉢、陶器灯明皿 (図版 12- 4)・土師質土器灯明皿 (図版 12- 6) が出土しました。

溝跡 (古代) (図版 5・10)

調査区西端部で発見しました。南北方向の溝跡です。溝の両端は調査区外に及ぶため全容は不明ですが、南側は西に屈曲する可能性があります。規模は上幅が約 2 m、

深さ 0.8 m 前後で、検出した長さは 9 m 以上に及ぶものでした。

遺物は土師器^{つぎ}坏・甕、須恵器^{すゑき}甕、平瓦^{ひらがわ}（図版 12- 7）が出土しました。

溝跡（近世）（図版 5）

調査区中央から南半部にかけて発見しました。近世の中でも新しいものと古いものが存在します。掘立柱建物跡と平行しており、空間を仕切る機能があった可能性があります。

（5）土壙

調査区の全域で 17 基発見しました。

土壙（図版 5・11）

調査区中央部南側で発見しました。平面形は方形です。規模は東西約 3.6 m、南北約 3.2 m、深さは 0.6 m 前後である。

遺物は陶器^{しやうはい}小坏（図版 12- 5）・丸碗^{まるわん}（図版 12- 3）・播鉢（図版 12- 2）・染付猪口^{そめつけ ちよこ}（図版 12- 1）が出土しました。

4 まとめ

- （1）調査の結果、掘立柱建物跡 3 棟、竪穴住居跡 1 軒、井戸跡 1 基、溝跡 16 条、土壙 17 基、他多数の柱穴を発見しました
- （2）遺構の年代は、古代（奈良・平安時代）と近世（江戸時代）の大きく二時期に分けることができます。

古代：竪穴住居跡 1・溝跡（古代）他

近世：掘立柱建物跡 1・2・3、井戸跡、溝跡（近世）、土壙他

このうち近世の掘立柱建物跡と、溝跡については、おおよそ平行して構築されていますので、一体の施設であった可能性が指摘できます。

- （3）今回の調査の結果、古代と近世の遺構を発見しましたが、それぞれの時間幅として、古代は 8 世紀後葉以前と以後、近世は 18 世紀から 19 世紀の期間と考えられています。



図版 5 調査区空撮合成写真



図版6 掘立柱建物跡1 (南から)



図版7 掘立柱建物跡2 (南から)



図版8 竪穴住居跡 (北東から)



図版9 井戸跡 (西から)



図版10 溝跡 (古代) (南から)



図版11 土坑 (南から)



1



2



3



4



5



6



7

図版 12 主な出土遺物（縮尺任意）

5 多賀城跡第 90 次発掘調査

宮城県多賀城跡調査研究所

1. 調査要項

所在地：宮城県多賀城市市川字坂下地内

調査指導：多賀城跡調査研究委員会

(委員長 佐藤 信)

調査主体：宮城県教育委員会

(教育長 高橋 仁)

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所

(所長 須田 良平)

調査協力：多賀城市教育委員会

調査員：須田 良平・吉野 武・三好 秀樹

白崎 恵介・廣谷 和也・高橋 透

調査期間：平成 28 年 5 月 23 日～10 月 14 日

調査面積：約 430 m²



図版 1 多賀城航空写真と調査区の位置 (南西から)

2. はじめに

当研究所では昭和 44 年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を継続して実施しています。近年は多賀城の外周りを囲む外郭施設の調査を進めており、今年度は坂下地区でその南辺の調査を実施しました (図版 1・2)。

多賀城跡第Ⅰ期の外郭南辺は、第Ⅱ期以降の位置よりも、約 120m 北側にあったことが近年の調査で分かってきています。

今回の調査は、低地から丘陵に上がる地点を調査し外郭南辺の規模・構造・変遷を解明することを主な目的としています。



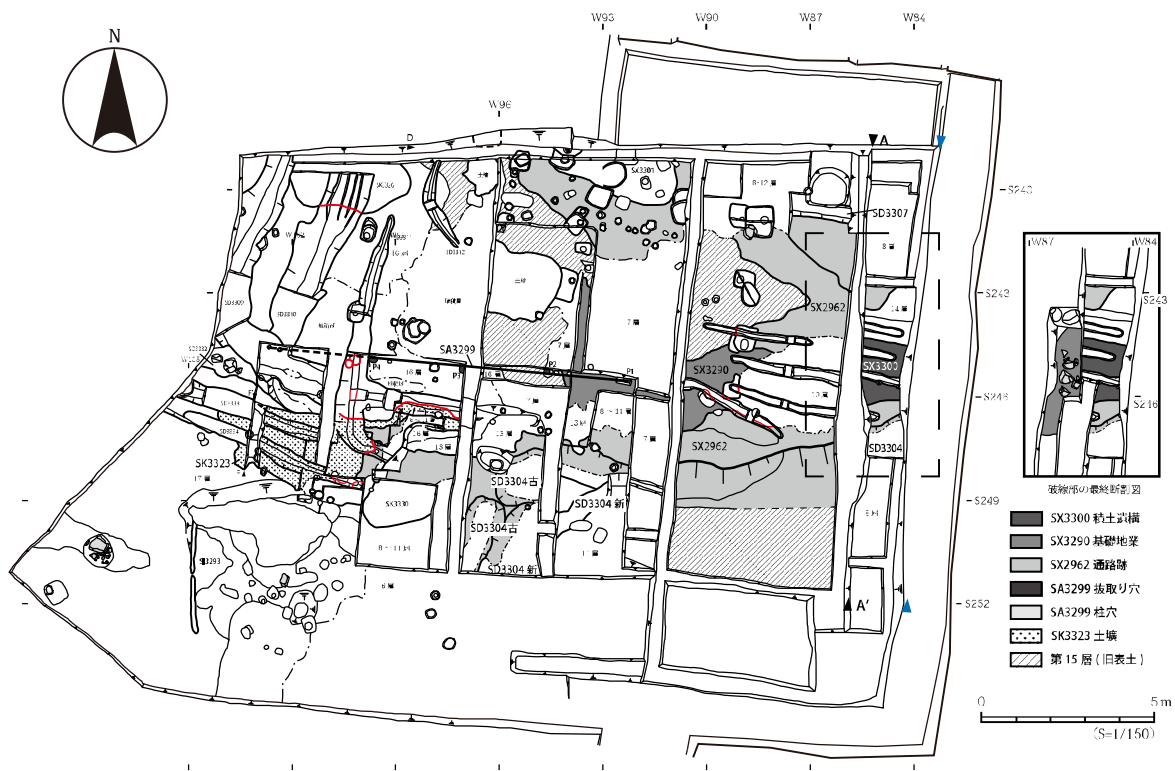
図版 2 第Ⅰ期の外郭南辺と調査区の位置 (南から)

3. 調査成果

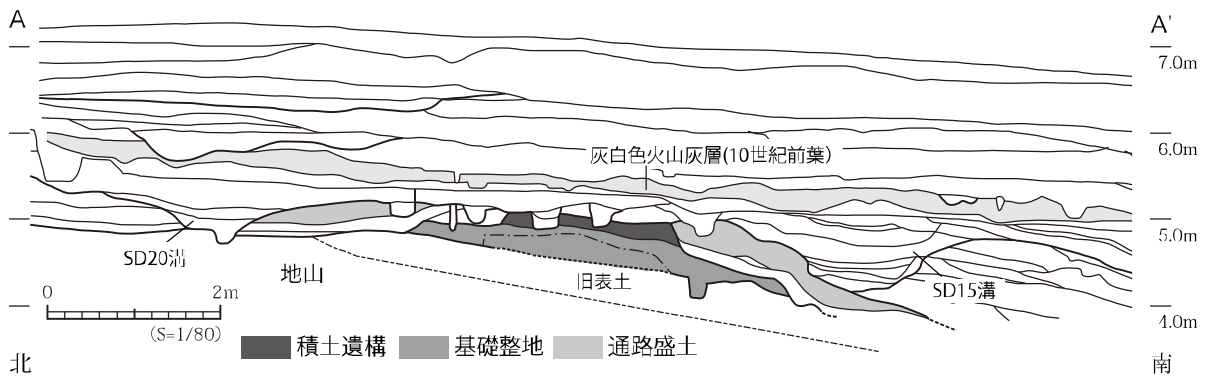
調査区内の地形は北西側が高く南東に向かって低く傾斜しています。調査は、古代の遺構が最も良く残るとみられる東側を中心に掘り下げました。その結果、以下のような遺構を検出しました。

- ①多賀城跡第Ⅰ期の積土遺構とその基礎地業
つみつちいこう きそちぎよう
- ②第Ⅱ期以降の通路跡
- ③灰白色火山灰降下（10世紀前葉）以降の井戸・畑の畝
うね

また、出土した遺物には土器、瓦、木製品などがあり、注目すべき資料として、通路の脇から出土した、文字の書かれた檜扇ひおうぎがあります。ここでは、主な成果として遺構の①②と檜扇について説明します。



図版3 調査区平面略図 (S=1/200)



図版4 東壁断面図

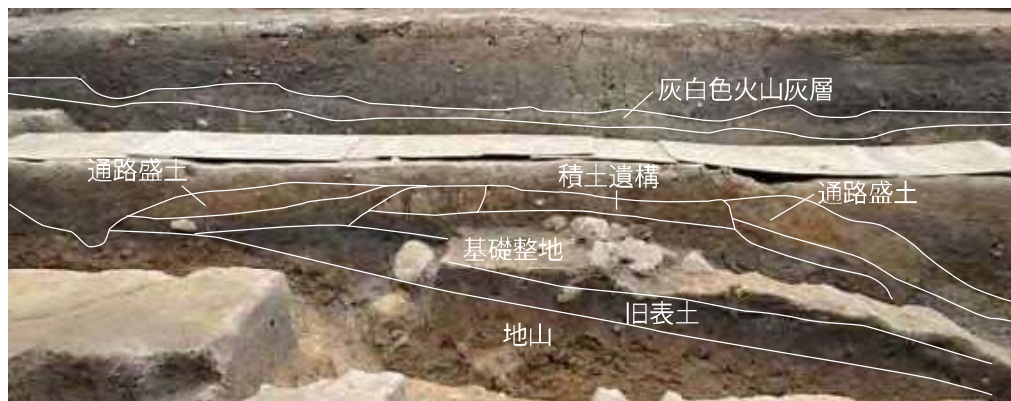
【成果1】 第Ⅰ期の外郭南辺について

調査区東端で、第Ⅰ期の外郭南辺となる積土遺構^{つみつちいこう}を東西の長さ 1.3m 分検出しました（図版3～6）。南北幅約 2.0m で高さは約 20cm 残っており、黄褐色の土と黒色の土を交互に平らに盛る方法で積み上げられています。この方法は「版築」と呼ばれる技法^{はんちく}に似ており、築地塀^{ついでい}の可能性^{ついでい}があります。その下には、土台となる基礎地業^{きそちぎょう}が南北幅約 4.5m の範囲に認められます。厚さ 30～40cm の黒色土を中心とした土で、一部には人頭大ほどの石が含まれています。

これらの遺構から、政庁南大路から西に約 95m のところまで、第Ⅰ期の外郭南辺が延びていたことが分かりました。また、約 20m 東の低地における外郭南辺は材木塀でしたが、今回の調査で、西側の丘陵では築地塀である可能性が高まりました。

【成果2】 第Ⅱ期以降の通路跡について

第Ⅱ期に外郭南辺が南側に移動した後、その高まりを利用してつくられた東西に延びる通路を長さ約 16m 分検出しました（図版7）。これは、第86次調査で検出していた通路の延長で、路面は見つかっていませんが両側に明褐色の盛土を確認しています。南北の幅は 4～8m 以上で、西側の丘陵に向かって広がる形をしており、時間がたち両脇に土砂が堆積した後は側溝が掘られています。通路が東側から西側の丘陵へ続くことがより明確になり、通路の先の丘陵にはなんらかの施設の存在が想定されます。



図版5 東壁断面写真（西から）



図版6 積土遺構拡大写真（南西から）



図版7 第Ⅱ期以降の通路跡（南西から）

【成果3】 檜扇^{ひおうぎ}について

今回出土したのは、「骨（橋）」とよばれる複数の細長く薄い板材を重ねて綴じた、木製の扇です。重なり方や接合結果などから、11枚分あることが分かっています。第Ⅱ期以降に使われた通路の南側堆積層からまとまって出土しており、元は1つの扇だったと考えられます。また、両面には多くの文字が書かれています（図版10・11）。

骨の長さは24.6～28.5cmで長さに違いがあり、先端を斜めに切ったものや、比較的平らなものがあります。幅は2cm～3.5cmで、手元から先端に向かって徐々に広くなり、側面を浅く^{えぐ}抉って整形しているものもあります。厚さは1～2mmで、手元には径2～3mmの^{かなめあな}要孔があります。

文字の内容は解読中で、「誦」「衢」「巍」などの同じ文字が続けて書かれた所は、役人が文字の練習をした^{しゅうしょ}習書とみられます。ほかに、数量を記載した「用十二石八斗二升五合」、国名・役職名の「美濃国史」があります。また、文字は骨の左側に寄ったものが多くみられますが、右側に寄るものもあり、扇の開き方と関連すると考えられます。送風具以外の、当時の扇の使われ方を考えるうえで重要な資料といえます。

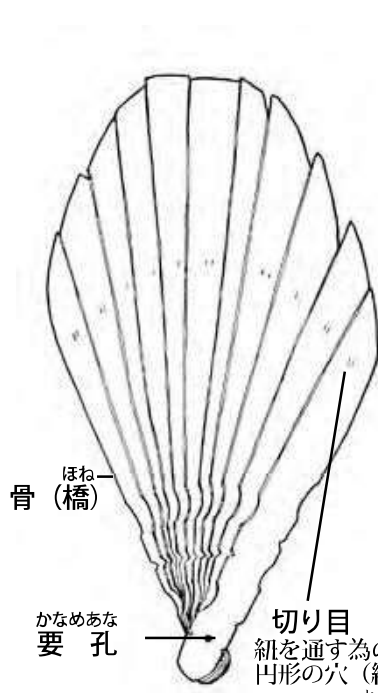
檜扇は、県内では山王遺跡^{さんおう}、市川橋遺跡^{いちかわばし}（共に多賀城市）、熊の作遺跡^{くま さく}（山元町）に出土例がありましたが、文字が書かれた檜扇は県内では初めての出土で、貴重な発見となりました。



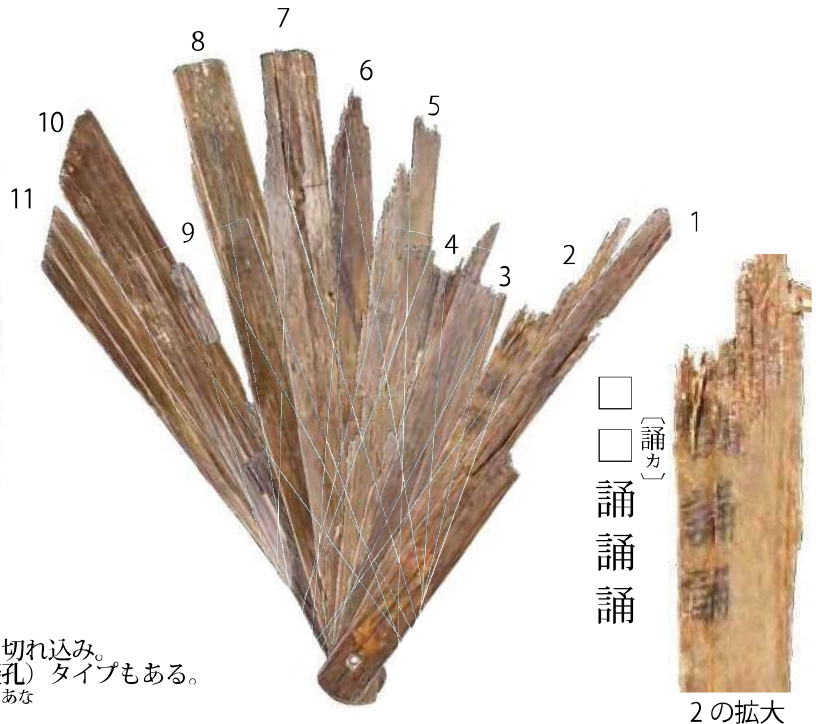
図版8 出土状況（南西から）



図版9 出土した状態の檜扇



図版10 檜扇の名称と復元イメージ
（『奈良国立文化財研究所 1985』に一部加筆）



図版11 出土した扇の復元イメージ (S=1/3)

4. まとめ

- ・第Ⅰ期の外郭南辺を政庁南大路から西に約95mの箇所まで確認しました。低地では材木塀であることがわかっていましたが、西側の丘陵では築地塀である可能性が高まりました。
- ・第Ⅱ期に外郭南辺が南側へ移動した後、第Ⅰ期の外郭南辺の高まりを利用した通路を確認しました。通路の先にある西側の丘陵に、実務官衙じつむかnergのような施設の存在が想定されます。
- ・県内で初めてとなる文字の書かれた檜扇を発見しました。地方官衙での文字が書かれた檜扇の出土は全国的にも貴重です。文字が多数書かれていることに加えて扇の形状も良く残っており、全体の構造や当時の使用方法を知るうえで重要な発見といえます。

【参考文献】

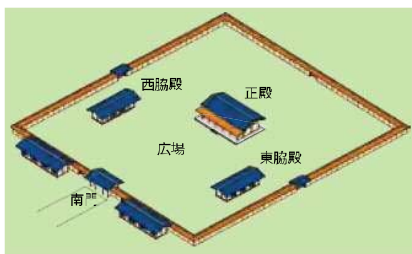
奈良文化財研究所 2010 「檜扇」『平城京事典』 pp 177-178

奈良国立文化財研究所 1985 奈良国立文化財研究所 史料第27冊 『木器集成図録 近畿古代篇』

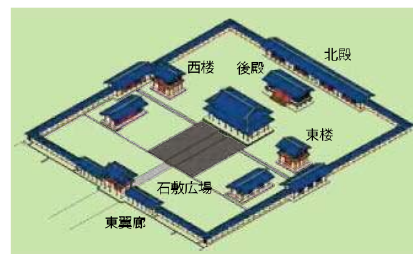
-多賀城跡について-

特別史跡多賀城跡は、奈良・平安時代の中央政府が陸奥国を治めるために置かれた国府の跡で、奈良時代には鎮兵ちんべいという兵士を統率する鎮守府ちんじゆふも置かれていました。

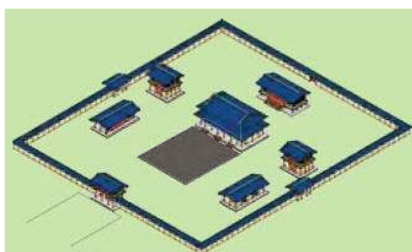
これまでの政庁跡の発掘調査によって、多賀城の変遷は考古学的に第Ⅰ期から第Ⅳ期までの4時期に大別できることが明らかになりました。この変遷は、城内の他の地区の遺構をみる際にも有効です。



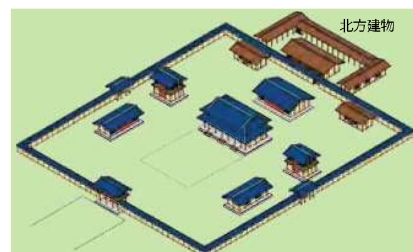
第Ⅰ期
神亀元(724)年 創建～天平宝字6(762)年 修造



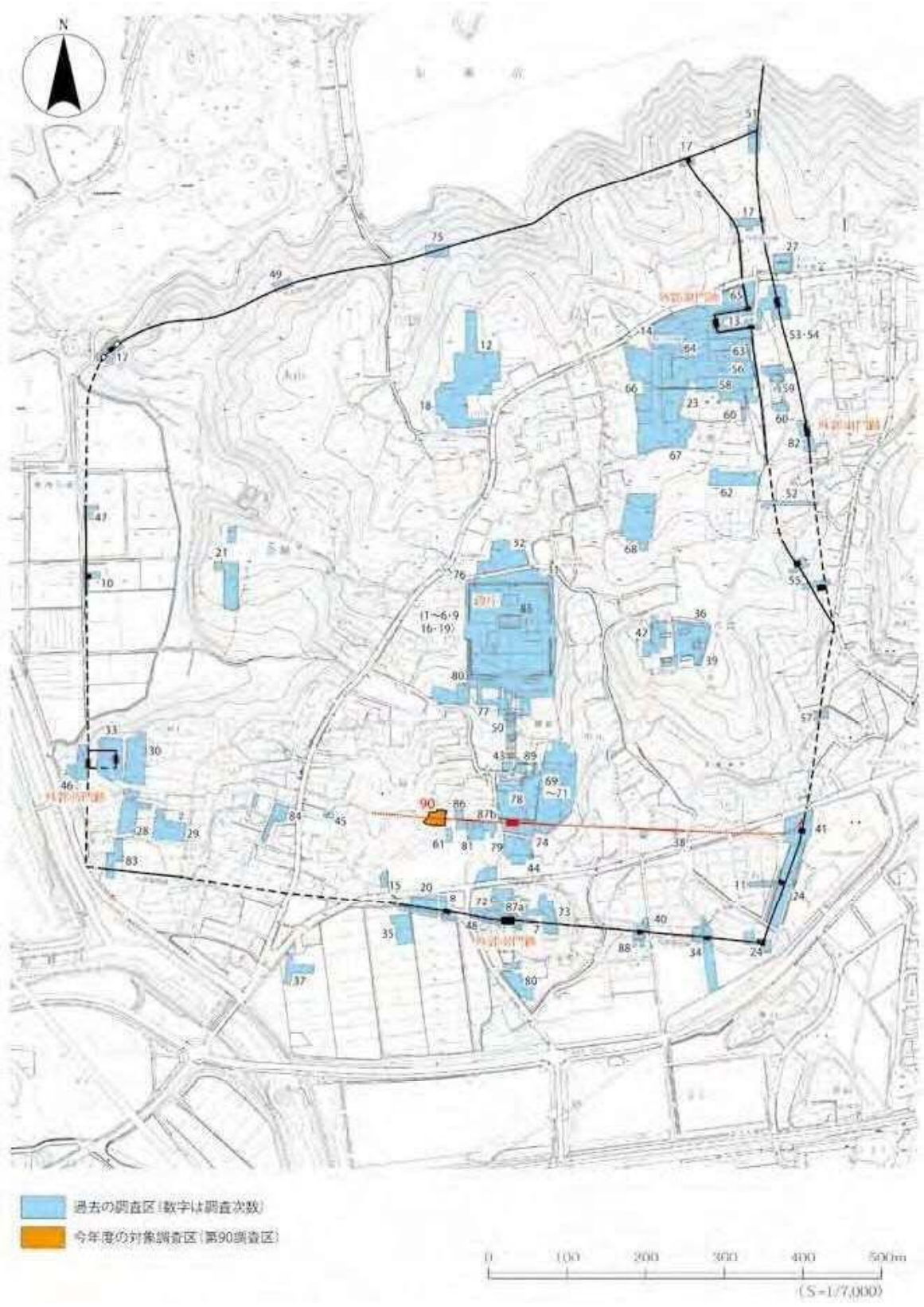
第Ⅱ期
天平宝字6(762)年 修造～宝亀11(780)年 伊治公皆麻呂焼討



第Ⅲ期
宝亀11(780)年 焼討～貞観11(869)年 陸奥国大地震



第Ⅳ期
貞観11(869)年 大地震～11世紀中頃



図版 12 多賀城跡全体図と調査区の位置